

元夕換札	新しき 年を迎へて願へども 努力怠しに成就せぬかも	厚木市 荒井 一雄
元朝初護摩	元日の朝一番の大護摩供修行を承け 高殿の仏様(飯繩様)に	
喜捨高殿仏	誠心誠意(喜捨す)...	
深拝深山僧	深山(高尾山)の徳の高き 僧侶様を深く拝し	
新符換旧符	旧きお札より早速、 新しきお札へと換へん	

### 折り折りの記 (101)

波多野 重雄

**書初に書道の腕を競いけり**

書初とは新年になつて初めて詩句などを書くことをいう。また、試筆・筆始・吉書とも言ふ。昔は元旦に書いたというが、今では二日に行うのが普通である。

書初は半紙を繋ぎ合わせ神棚に張るよう準備し、火鉢に悴む手を焙りつつ書いた。親戚に配ると二銭か二銭の駄賃をくれた。新年の飾り物を神社や広場にて焼く行事を左義長という。一般にどんど焼きという。書初をこの火の上にかざして高く昇らせ書道の上達を祈り、勝敗を争つた思い出が懐かしい。

「書初はたゞ丁寧にく」虚子  
(高尾山健康登山の会々々)

「餓鬼」については、以前「高尾山報」(六〇七号)で、お釈迦様の弟子の目連尊者が、餓鬼道に苦しむ母を救つた、施餓鬼のもととなる話を書きました。あらためて「餓鬼」について触れてみたいと思ひます。

餓鬼道は、前号で見た「地獄」の一つ上に位置し、生前の「欲深い行い」によつて墮ちる場所と言われれています。わんぱくな子供に対して「悪餓鬼」とか「餓鬼大将」とか言いますが、これも、もともとは食べ物に際限なく欲しがらる餓鬼の様子に似ていることから使われるようになりまして。

日本において餓鬼は、古く奈良時代の『万葉集』に「男餓鬼」「女餓鬼」として登場し、その姿は平安時代末期の『餓鬼む日』を表す言葉だとかお盆にはお寺で「施餓鬼」という行事が行われますが、お正月にもそうした心持ちで手を合わせるのです。

「沙石集」  
地蔵菩薩は、あえて母親と息子を会わせただけでしようか。変わり果てた母の姿を目の当たりにして言葉も失つた讃岐房に、地蔵菩薩は「母を救いなさい」と諭してしまふ。餓鬼道は、他の世界と異なつて、親子兄弟などの肉親が供養をすれば、救い出すことができると説いています。そのことを伝えたかったのかもしれません。

「餓鬼の目に水見えず」(餓鬼は飢えの苦しみから、傍らの水にも気付かない)と言いますが、母

親は息子を忘れていませんでした。再び生き返り、母の追善供養に励んだ讃岐房は、母親とどのような再会を果たしたでしょう。前号の、地獄で母親と巡り会つた蓮円のよう、母の目には息子が地蔵菩薩のように映つていたことが想像されます。

一つの水を、  
人は水と見、  
餓鬼は濃汁と見、  
魚は室宅と見、  
天人は琉璃と見る。  
(「沙石集」)

(同じ水を見ても、人は水と見え、餓鬼は濃汁と見え、魚は住まいと見え、天人は宝石と見える)これは、同じものを見ても、見る側の心によつて別々の考え方を抱くという「水四見」の教えです。新年を迎えて、雪を花と見るように、何気なく過ぎていく日常を、珠玉の日々と噛み締めるから歩んでいきたいと思ひます。

(栃木北部教区普濟寺)



霞立ち  
木の芽もはるの  
雪降れば  
花なき里も  
花ぞ散りける  
(古今集「紀貫之」)  
(初霜が棚引いて、木々の新芽もふくらむ春に雪が降るので、花がまだ咲かないこの山里にも、淡雪のような白花が散つてくるよ)

今年も新しい年を迎えました。この歌に見られる「はる」には、草木が芽ぐむ「張る」と季節の「春」が掛けられています。年があらたまれば、空から舞い落ちる粉雪も、桜吹雪と見紛うでしょうか。

一月は「睦月」とも呼ばれます。語源は諸説ありますが、新年を迎えて、親類知人が往来して仲睦まじくする月だからとか(「奥義抄」)。あらためて

人と人々を結ぶ縁を感じる折節でもあるのでしよう。ところで、こうした繋がりには、何人も人間同士に限つたものではありません。お盆には精霊棚を作つて、ご先祖様をお迎えしますが、お正月にも門松を立てるなどして、年神様をお待ちします。十五日の小正月を中心として、正月の七草はお盆の七夕(七日盆)に当たると、両者は似通つた性格を持つています。年の始めのお正月は、お盆と同じように「亡き人と睦月」でもあるのでしよう。

そういう意味では、地方の方言に「餓鬼の首」という言い方が悪くそうです。少し気味悪く聞こえるかもしれませんが、「お盆や正月に仕事を休む日」を表す言葉だとかお盆にはお寺で「施餓鬼」という行事が行われますが、お正月にもそうした心持ちで手を合わせるのです。

「地獄」の一つ上に位置し、生前の「欲深い行い」によつて墮ちる場所と言われれています。わんぱくな子供に対して「悪餓鬼」とか「餓鬼大将」とか言いますが、これも、もともとは食べ物に際限なく欲しがらる餓鬼の様子に似ていることから使われるようになりまして。

日本において餓鬼は、古く奈良時代の『万葉集』に「男餓鬼」「女餓鬼」として登場し、その姿は平安時代末期の『餓鬼む日』を表す言葉だとかお盆にはお寺で「施餓鬼」という行事が行われますが、お正月にもそうした心持ちで手を合わせるのです。



初詣に桜吹雪のような粉雪が舞う